

ほやほやっうしん

02

ごあいさつ —— かまいしこども園の活動紹介と、子どもたちへの遊びのきっかけを盛り込んだフリーペーパー「ほやほや通信」第2号をお届けします。今号では、かまいしこども園が2016年から実施している「ぐるぐるミックスin釜石」の取り組みを紹介します。アーティストが遊びを通して子どもたち一人ひとりの祝福の瞬間を引き出す「ぐるぐるミックス」の手法は、5年間を通してこども園の先生と子どもたちにどのような変化をもたらしたのでしょうか？



02 鼎談 | 遊びの環境をつくる実験場

天野珠路（鶴見大学短期大学部教授）× 藤原けいと（かまいしこども園）
× 渡邊梨恵子（谷中のおかって）

03 じんじんからのお手紙 | きむらとしろうじんじん

04 あたまにうちゅうじん | 大西健太郎

06 子どもたちの応援団

かまいしこども園の先生たち/いっしょに読んでみよう!

はなとの出会い/りんめいさんのミックスクッキング/4コマ漫画

08 活動報告 | 9-11月のプチぐる/プチぐるができるまで

遊びの環境をつくる実験場

～ぐるぐるミックス in 釜石をめぐる～



天野珠路
(鶴見大学短期大学部教授)
×
藤原けいと
(かまいしこども園)
×
渡邊梨恵子
(谷中のおかって)



2016年から、東京・台東区を拠点にアートプロジェクトを企画運営する谷中のおかってと取り組む「ぐるぐるミックス in 釜石」。アーティストを講師に、子どもたちの興味を引きだして遊びを誘発する試みは、年を重ねるごとに、かまいしこども園の先生たちによる自主的なアートプログラムの実践へと発展し、子どもたちの日常にも影響を与えています。5年にわたる「ぐるぐるミックス in 釜石」の活動について、保育学が専門の天野珠路教授をゲストに迎えて、藤原けいと園長と谷中のおかっての渡邊梨恵子さんに、オンラインでディスカッションをしていただきました。

2020年11月24日 収録 聞き手・構成：小林英治

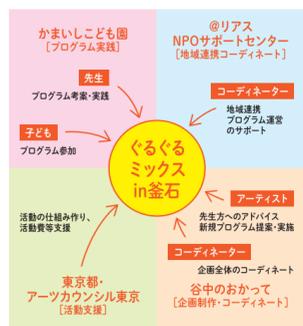
かまいしこども園との出会いと関わり

—— 谷中のおかっての皆さんが、かまいしこども園と「ぐるぐるミックス」の活動されるようになった経緯を教えてください。

渡邊 私たちが初めてかまいしこども園と活動をご一緒させていただいたのは、2016年の2月です。実はその前の2012年から、東京都の被災地支援事業の一環で、大槌と釜石には「きむらとしろうじんじんの野点」というアートプログラムで関わっていて、そちらで一緒に活動していたのが、「ぐるぐるミックス」の講師のひとりでもあるアーティストのきむらとしろうじんじんです。じんじんさんはアートの活動と併行して、京都の私立幼稚園で子どもアトリエというのを20年近くされていて、谷中での「ぐるぐるミックス」も、そこでの経験やノウハウを教えていただきながら立ち上げた経緯があります。「釜石でも子どもたちの活動ができたらいいよね」という話は、大槌や釜石を訪れるたびに話していて、その活動の中で@リアスNPOサポートセンターの川原さんとの出会いがあり、川原さんを通

じてかまいしこども園と接点を持たせていただいたのがきっかけになります。園長 私としては、日頃からいろんな活動を子どもたちにさせたいなと思っているので、園の外からいらっしゃる方が取り組む活動も面白いなと思って、まずはお試しという感じで一緒に取り組ませていただきました。でも最初の頃は、私も含めて、たぶん職員は100%受け身だったような気がします。皆さんが「ぐるぐるミックス」を行うのを手伝ったり、もっと言えば子どもたちと一緒に「わー、楽しい!」と思っていたようなところから始まりました。渡邊 2016年の夏から本格的に「ぐるぐるミックス in 釜石」として年に何度か活動をさせていただきました。初めの頃はこども園の先生にも東京に何度か来ていただいていたのですが、逆に私たちがこども園に終日居させてもらって、保育の現場で先生たちがどんな日常を過ごされているのかを勉強しながら、この中で私たちが

できることは何だろうということを考えていました。2年目の2017年には、こども園で私たちが「ぐるぐるミックス」をやったあとに、先生たちが残りの素材を使って自主的に後日のクラスでもう一回やってみるような動きが出てきたり、3年目には、こども園の先生が自身が考えた遊びを自分のクラスでやってみる「プチぐる」が始まりました。この年は先生たちを対象に、アイデアを形にする力をサポートするためのワークショップを新たなアーティストを加えて実施しました。4年目となる昨年には、各クラスで1回ずつ、0歳児のクラスを含む全部のクラスで「プチぐる」を実施できるようになりました。今年はコロナの影響もあってうかがえなかったのですが、先生たちがクリエイティブな遊びを展開されている様子を動画で拝見し、一緒に振り返りをしたりしています。そういった形でちょっとずつ変化しながら、こども園の皆さんとアーティストと一緒にこの活動を続けています。



ぐるぐるミックス in 釜石 事業実施体制 (2020年現在)



2018年9月にばんだ組(3歳児)で行ったプチぐる「おもいっきり絵の具」

相互に影響を受けながら築く信頼関係を子どもたちに伝える

—— 天野先生は、外部の方がこども園に行って活動をとにもするというケースをいろいろご存知だと思いますが、そのときに注意すべきことはありますか？

天野 保育者が、専門の方たちにすっきりお任せしてしまわないようにと思っています。保育者は子どものすべてを知りたいし、子どもたちのいろんな顔や姿を見たいはずで、外部の専門性をもっての方にファシリテーターになってもらって、保育者と一緒に楽しみながら、子どもたちの中の多様性や可能性が引き出されていくというと思います。今のお話を聞いていると、保育者がだんだん主体的に関わるようになってきているということでしたので、そういう方向でぜひ継続していただきたいです。

園長 今年でもう5年目になるんですね。皆さんと一緒に「ぐるぐるミックス」を繰り返していくうちに、先生たちが「自分たちでもできるんじゃない?」っていう気持ちが芽生えてきて、そこから何かが変わってきたのかなと思っています。最初の頃は「く

ぐるぐるミックスをする日」というのを設けていたんですけど、「その日だけじゃなくても、どどんいろんな遊びを取り入れてもいいんじゃない?」という思いも出てきたようで、私としては、それを日々の保育にどんどん入れてほしいなと思っています。ただ、園の外から人が入ったときに普段と違う感覚が出るということも確かにあって、特に「ぐるぐるミックス」のときには大胆なことができるというイメージが先生たちの中にあるみたいです。

—— 講師のじんじんさんや大西さんを見ていて、保育者とは違うアプローチや振る舞いを感じる部分はこういった点ですか？

園長 遊びに入る前の「導入」にはいつも驚かされます。本当に魅力的に子どもたちを引きつけて、遊びに入ったあとは子どもが自分たちのしたいことができるようにする、その流れが見事だなあと。そして、そういう導入が始まった遊びなので、いつも子どもたちが好きなことを思いっきりやっているんです。これこそが、保育、というより本当の意味で遊びの力なんですよね。そ

の技を先生たちも盗みながら、自分たちの技術につなげていってほしいなと思います。渡邊 「ぐるぐるミックス」の活動自体が、何か正解を子どもたちに見せて、同じようにやってみようというのではなく、素材自体の面白がり方や遊びの幅を興味のきっかけとして手渡すようにするということは、いつも意識していると思います。

天野 互いに学び合ったり、影響を受け合ったりする相互性が大事で、そういう中で小さなネットワークのようなものが生まれていくといいですね。大人同士が協力して信頼関係を築いている、これこそが子どもたちに伝えたいところです。子どもは大人の背中を見て育つと言いますが、大人の関わりをよく観察して、その姿に多かれ少なかれ影響を受けていることでしょう。一方で、今の社会の中で、人々が孤立したり分断されたりしているといった現実があるかと思いますが、こうした中で子どもを真ん中に、子どもたちを核にして、大人同士が協力して信頼関係を築いている姿を子どもたちに伝えたいし、子どもた

ちもそこから感じ入るものがきっとあるはずだと思うのです。

園長 そうですね。震災後、いろんな方たちがうちの園に来てくださって、いろんな関わりが本当にたくさんあったと思います。「やってみようか」から始まったものが、こうして長く続いて子どもたちや職員にすごく大きな影響を与えてくださっているの、やっぱり人との出会いというのは素晴らしいと改めて実感しています。子どもたちにとってもいろんな人との関わりはすごく大切だし、もっともっと経験させたいなと思っています。



講師を務める大西健太郎の「導入」を聞きながら、これから体験する遊びを想像する子どもたち

こども園の中だからこそできるダイナミックな活動

渡邊 今年度の活動は私たちも映像で拝見しているのですが、この間の4歳児の「プチぐる」では、ホールで床にも壁にも一面に紙を広げて思いっきりお絵かきをするようなプログラムをされていました。子どもたちは手と足も絵の具まみれになりながら、先生たちがすごく落ちついて対応されていたのが印象的でした【P8参照】。

園長 先生たちも、ぐるぐるの皆さんの活動で慣れちゃったんじゃないかな(笑)。今年は夏にも5歳児が園庭で同じような活動をして、そういうダイナミックな活動が続いているんです。最初に計画書を見たときには、みんなもっと違うことすればいいのと思ったんですけど、実際に先生たちや子どもたちを見ると、あ、ただ単に同じことをするんじゃないかと、この活動こそがしたかったんだと伝わってきました。

天野 保育現場で長時間過ごす子どもたちにとって家庭的な温かさや安心感できる室内の空間というものが求められたいんですけど、一方で、家庭ではできないことを体験すること、家庭とは異なる環境の下で思う存分楽しめることが大切です。自分より大きなオブジェや長い紙に囲まれたり、全身を使って格闘したりすることで、「もっ

と大きくなりたい!」という気持ちも促されるのではないのでしょうか。

園長 まさにその通りだと思います。絵の具をたくさん使ったり、ダイナミックに服も汚れたりということは、やっぱりなかなかお家ではできないので、それができる楽しさや喜びは、子どもたちを見てすごく伝わってきます。この間の4歳児の「プチぐる」のときは、集中して楽しんでいる姿にちょっと感動しました。中には手が汚れたり服が汚れたりするのを嫌がる子もいるんですけど、その子もずっと見ていたら、だんだん楽しくなって、最後にはぐちゃぐちゃになっていました。いろんなことを子どもたちが考えて、それぞれのやり方で楽しんでいるんですね。家庭では絶対できない活動というのは本当に素晴らしいと思いますし、やっぱりそのきっかけは「ぐるぐるミックス」が与えてくれたのかなと思います。

楽しんでということもあるし、私たち保育者が気づかされたということもありますし、思いもよらない展開というのはみんなにとっていい結果なのかなと思っているので、見てとても楽しいです(笑)。

天野 いいですねー。普段は他の子にいたずらしたりして駄目って言われているような男の子が、ダイナミックな遊びに没頭している姿は惚れ惚れしますね。夢中になると、人にちょっかいを出して暇はないですよ(笑)。だから、育ちゆくエネルギーが強くあふれている子が、普段そういうもの足りなさ、遊び足りなさの中で、ついエイッと手を出してしまうこともきっとあったんだろうと、日常の保育を見直す機会にもなるのではと思います。もっとやってみたい、もっと伸び伸び遊びたいという子どもの思いを汲んであげたいですね。

園長 本当にその通りです。今年度は「プチぐる」をしたときに、他のクラスの子がやっているのを見て、普段の遊びの中でちょっと真似してみたり、こうしたらもっとよくなるねと先生同士が話したりする場面も少しずつ出てきているので、それがもっと広がってほしいと思います。そのためにも、今先生たちが一生懸命話し合っ

いて、天野先生にもご助言をいただきながら、子どもたちにとってのより良い遊びの環境を整えようと頑張っているところです。天野 素晴らしいですね。完璧な保育環境というものはたぶんないのです。この子にとってはいいけれどこの子にとってはもの足りないとか、時期によって興味が変わったりとか。子どもたちが関わることで環境も変わっていくので、その度に試行錯誤しながら、今できる最善のものを探求していただきたいです。そして、子どもたちと関わる中で気づいたことがあれば、それを取り入れて遊びの内容や保育環境を柔軟に変えていって欲しいです。保育は生ものですからね。渡邊 私たちも、また先生や子どもたちに会える日を楽しみにしています。今日はどうもありがとうございました。



2020年度はプチぐるの様子を親御さんや関係者に向けてYouTubeで限定公開した

今日はぐるぐるミックスを立ち上げた頃考えていたことを少し書いてみようと思います。谷中のおかつてのみなさんとぐるぐるミックスを立ち上げたのは2010年度末だったかな？ 当時の僕は1995年から京都の私立幼稚園でずっと行ってきた「こどもアトリエ」での活動に（とっても充実した素晴らしいアトリエであつたし、今もそう思っていますが、でも）どこか飽き足りない……うまく言えないけれど「何かが足りない」……そんな感覚を抱いていたように思います。

う～ん、立ち上げ当時一番思っていたことは、何だったろう？ まずひとつめは、「お絵描きや工作を嫌いには絶対にさせないぞ～!!」でしたね。

こどもアトリエのようなこと・場作りをかれこれ25年以上やっていますが、描いたり作ったりすることが「ほんまに嫌い」な子には（絶対とは言えませんが）あまり会ったことがない気がするのです。でも、お絵描き教室や造形教育・指導が絵や工作を嫌いに「させてしまっている」瞬間は（残念ながら）沢山見て来たような気がします。絵の具は大好き、色を塗るのも、筆の走る感じも大好き……、なのに「さあ、みんなで絵を描こう!!」って言われると、とたんにどうしていかかわらなくなっちゃう。子どもに限らず、誰でも思い当たる節があるんじゃないでしょうか？（僕も思い当たります・笑）

いや～、こりゃいかんですよ。もちろん、得意不得意や相性は誰にでもある。でも、それは、子どもたちが大きくなっていく過程でそれぞれのペースで直面して自分自身で（無意識に、も含めて）いろんな偶然・必然にまみれながら出会い選択していくもの。幼稚園や保育園に在るような年齢の間は、とにかく「嫌いになんかさせないぞ～」が第一だって思ってたし、今もそう思っています。僕は絵描きや工作が好き。自分が好きなものを嫌いにさせてどうすんねん。とにかく、上手にできるように指導するんじゃなくて、魅力を（その子感だけでも）手渡したい、魅力的な入り口さえ設定できれば……。今でも、それが一番大事な気がしています。

ふたつめは、「子どもたちにとっては大人が一生懸命やってる作業というのは、どれも、全て魅力的なものに見えている」ということ。これも、ずっと子どもたちと工作やお絵描きをしてきて、今でも全く揺らがない確信です。

ひとつめの話の「魅力的な入り口」っていうのは、「子ども用に、簡単に、楽にできるようになっていること」とは全く、もう、まったく違う。大人が重い石を持ち上げてるのを見たら、子どももやっぱり重い石を持ち上げたいんですよ。発泡スチロールの「子ども用の石」なんて持ち上げたくない（笑）、プライドが許さない（笑）。もちろん、体力にも経験にも違いがあるわけで、子どもに大怪我するような無茶をさせたいわけじゃないし、それはしてはいけない。でも、こちらが勝手に・なんとなく・簡単に「子ども用」を設定するっていうのは、子ども「たち」をあまりにも均質に捉えた、とっても失礼なことのように感じます。「大人（自分自身）が本気でおもろがれる、没頭できるような作業」を子どもたちにどうやって手渡すか……。これを、とっても重要だと感じていました。とっても単純で、一番重要なこと。機嫌よく・没頭して作業してる人の姿っていうのは、子どもたちにとって（きっと大人たちにとっても）最高に魅力的で引きつけられるものであり、最良の入り口である。シンプルな話です。

アーティストなんて大仰な名前と呼ばれる人であるかどうかよりも、その人が、嬉々としてあれ、しかめっ面であれ、打ち込んでいる作業やその身体の動き（フォーム）は子どもたちにとってすべて魅力的。魚屋のおっちゃんが魚を扱うフォームも、ベテランのレジ打ちの店員さんのテキパキした動きも声も、絵描きが画面に絵の具をのせる動きも色も、郵便配達員さんのスーパーカブの運転も制服も、もちろん給食室の調理作業も盛りつけも、工事現場でユンボで穴掘ってる作業も音も……。アーティストと呼ばれる人も、あくまでその一人。強いて言うなら、自分がやってる作業や自分のフォームに対するこだわりがめっちゃ強い人（ええ意味でも悪い

意味でも・笑）。そして自分の好きなものやことを、好きと言いつけるのが仕事（ええ意味でも悪い意味でも・笑）、という意味では、魅力の入り口への、ええ案内人にはなれるのかもしれませんが。

なので、最後のみつめは、「子どもたちには今のうちに本当に本当に色々な大人たちと出会っておいて欲しいなあ」ってこと。

ぐるぐるミックスを立ち上げる前の7～8年間ぐらいは——2001年に大阪の小学校に男が乱入して何人もの子どもたちの命が奪われた事件の影響がすごく大きかったと思うのですが——とにかく「子どもたちを隔離する」＝（イコール）安全、という方向に一気に世の中の空気が進んでいるように感じていました。子どもたちが集まる場所を地域に「開いて守るのか、閉じて守るのか？」という議論も少しはあったような気もするのですが、大きな流れにはならなかった。僕が動めていた幼稚園の入り口にも監視カメラが付いて、身分証の携行が厳密になり、校舎が新築された時には園舎を2階に上げて外からは一切子どもの気配が感じ取れない建物になり、外から園に人を呼ぶ機会も設けにくくなって、子どもの居場所がどんどん隔離されていく。でも、その一方で「子どもにとっての〈体験〉の大切さ」だけは熱心に語られ、アーティストによるワークショップ的な催しはさかんに奨励される……。とっても大雑把なまとめかたですが、そんな空気を感じて、なんか、ほんまにモヤモヤしていました。

僕が一番大好きだった「子どもたちと小さなスケッチブックを抱えてクレヨンや2～3本ポケットに入れて、近くの商店街に（あらかじめ挨拶回りをしといて、ですが）お散歩＆スケッチに行く」っていう時間でもできなくなっちゃった。

そうこうしているうちに、今や幼稚園や保育園を作るとなると「苦情」が出る世の中に。僕が動めていた幼稚園でも「子どもの声がうるさい」という苦情が総務から（幼児教育学科がある短大付属なのに!）来る。

「ない」ことが普通になると「ある」ことが迷惑になる。「見えない」ことが普通になると「見える」ことが危険と感ぜられるようになってっちゃう。「親」か「先生」以外の大人と子どもが出会うことができるだけ避けることが「常識」になろうとしている。コロナ禍でこの傾向がさらに強まってしまわないことを、心から、心から、ほんまに願っています。

ぐるぐるミックスを立ち上げた当時、こんなことを考えていました（コロナ禍の一文だけは今強く思っていることです）。こうして書いてみると、今も考えてることはあまり変わらないなあ～、と思います。谷中のぐるぐるミックスも釜石でのぐるぐるミックスも、まだまだ続いてほしいなあ。「出会わないことが普通」にならないように。

そして、「色々な大人たち」の中には当然（いや、誰よりも先に）こども園の先生方も含まれる。だからこそ、ほんま「ブチぐる」はずんばらしいと思います。先生方が、ご自身が「魅力的だ! 子どもたちに手渡したい! 一緒にやってみよう!」と思われることをどしどし実現していく。そのためのヒントにぐるぐるミックスがなれるなら、ほんまに最高!!

これからかまいたしこども園での子どもたちと先生方の「あそび」がどんな様子になっていくのか、どんな風景が生み出されていくのか、とっても楽しみにしています。

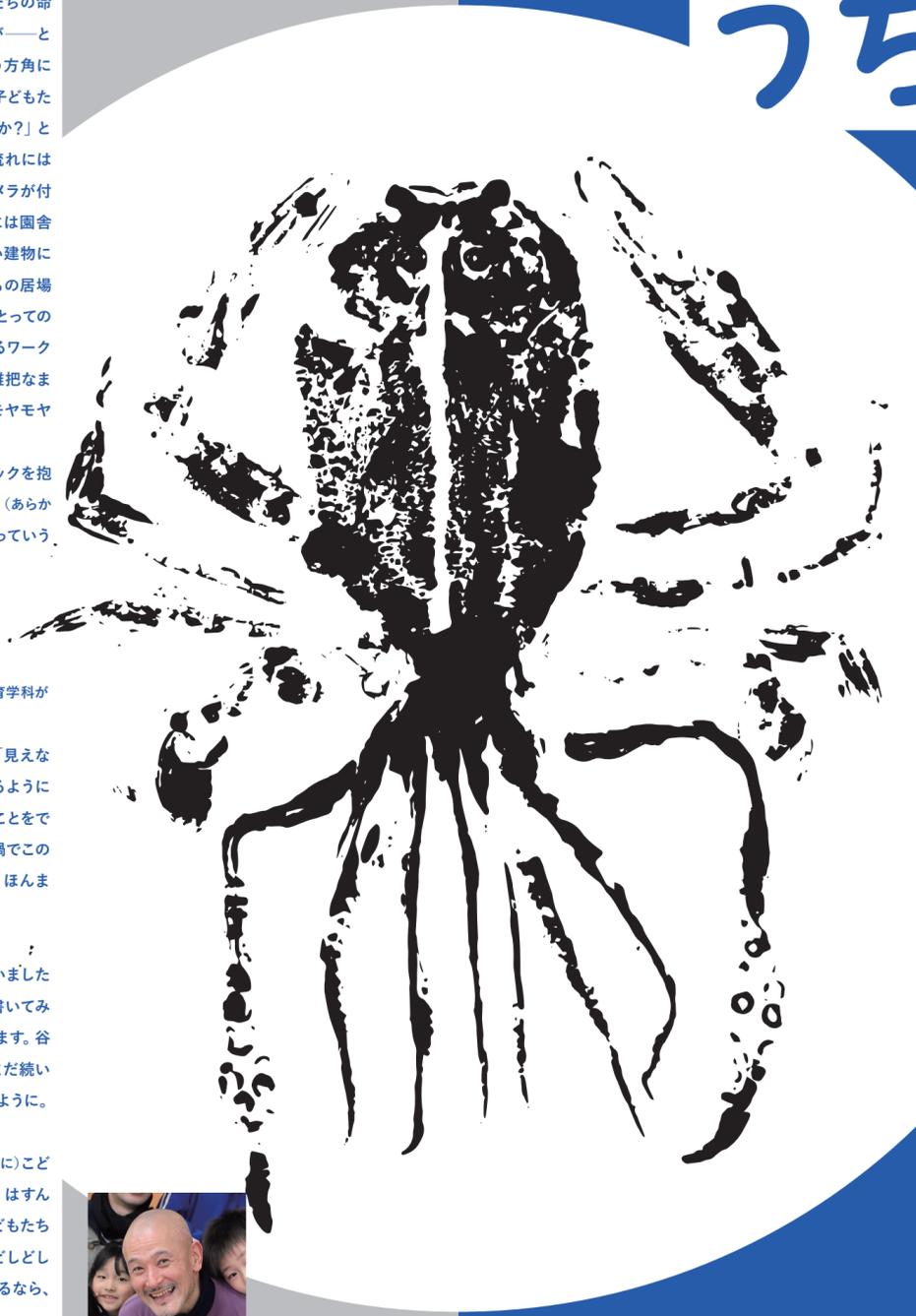
2011年の12月から続く、釜石・大槌のみなさんとの御縁に心から感謝しつつ。

2020年12月
きむらとしろうじん



© Miho Kakuta

きむらとしろうじん
美術家。1995年より移動式の陶芸お抹茶屋台「野点（のだて）」をスタート。路上、空き地、公園など、さまざまな土地と風景の中で開催しつづけており、2012年より大槌や釜石でも実施。2011年に東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人谷中のおかつての共催によるこども創作教室「ぐるぐるミックス」の立ち上げに関わる。2016年度よりかまいたしこども園で実施する「ぐるぐるミックスin釜石」の講師を務める。



あたまに うちゅうじん

うちゅうじんを
あたまに
のせて、
あたまから
おちないように
てを
はなせるかな？
うちゅうじんを
あたまに
のせて、
なるべくとおくに
いってみよう!

大西健太郎（おおにし・けんたろう）
アーティスト、ダンサー。風と遊びの研究所主宰。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了後、東京・谷中界隈を活動拠点に、その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「ころがおどる」ことを求めつづける。2011年よりこども創作教室「ぐるぐるミックス」でファシリテーター及び統括ディレクターを、2016年度より「ぐるぐるミックスin釜石」の講師を務める。2017年より、板橋区立小茂根福祉園にて他者との共同創作によってつくり出す参加型パフォーマンス「お」ダンス プロジェクト」を展開。2018年、南米エクアドルにて「TURN-LA TOLA」の参加アーティストとして、地域住民と共同パフォーマンス（El Azabiro de La Tola）の公演を行う。



いっしょに
読んでみよう!
オススメの絵本紹介



すいせん
芳賀瑞穂 (はが・みずほ) 先生
『りんごかもしれない』
(ブロンズ新社)
絵・文: ヨシタケシンスケ

ヨシタケシンスケさんの絵がかわいくて大好きなシリーズ(『発想えほん』)です。『りんごかもしれない』は、りんご一つでたくさんの想像ができる絵本です。親子で一緒に楽しめるので、こども園でも子どもたちと驚きながら見えています。



すいせん
川原尚子 (かわはら・なおこ) 先生
『ぼんやきゅう』
(ポプラ社)
絵: 長谷川義史 文: 指田 和

私は中学生からの野球ファンです。好きなプロ野球チームは、釜石でテレビ放送が見られるジャイアンツでしたが、高校野球や『ドカベン』の大ファンでもありました。そんな私が『ぼんやきゅう』の存在を知ったのはいつだったでしょう。お盆に帰省したひとを集めて野球大会をする……そんなことが普通に納得できるほど釜石は野球が盛んだったのです(新日鐵は都市対抗野球大会にも出ていました)。「なんでお盆の忙しいときに!」というお母さん方はいなかったのかなあ〜とほほ笑ましく思います。

この絵本は何といっても長谷川義史さんの絵が圧巻です。海の男たちの野球にかける意気込みが、ダイナミックな絵にすごく表れています。また、試合の場面にたった1つだけ出てくる赤い大漁旗(釜石はスポーツ応援の際に大漁旗を振ります)も印象的です。そして、最後のページには海を見ながら来年を楽しみにするおじいちゃん和孫。これからの釜石の復興への願いがすごく現れていて、震災への感傷と今後の希望が混じった気持ちになる作品です。



ある家族の物語

はなの出会い

澤田利子 (さわだ・としこ) 先生



うちの次男坊の誕生日は平成9年3月11日。平成23年の誕生日には、「かねてから次男坊がほしがっていた犬を買いに行こう」と夫婦で考えていました。しかし、あの日、釜石は大地震と大津波に襲われ、家族が無事だったこと、避難生活とで、犬のことは忘れていました。その年の夏、ふっと犬のことを思い出した私は、「そうだ、犬を買いに行こう!」と、息子とばあちゃんを連れて内陸のペットショップまで行きました。本当はオス犬を希望していたものの、そこにいたのはメス2匹。「どっちがいい?」と息子に聞き、「せーの!」で私も息子も同時に指を差したのが、今の犬「はな」でした。そこから、犬との生活が始まりました。犬を飼ったことがない私たちは、何から何まで初めて。主人は犬好きで、子どもの頃から犬を飼っていましたが、当時は単身赴任中だったので手は出せず……。毎日みんな(息子は3人います)で犬と戯れたことが、震災でつらい思いをし、毎日不安いっぱい暮らしていた家族の心を癒してくれたのは言うまでもありません。そんな「はな」も9歳になりました。いろいろな芸はできませんし、家族を守る番犬でもありませんが、そこにいるだけでいいんです。そこにいてくれるだけで……。だって家族ですから! これからも一緒に楽しく過ごそうね。

かまいしこども園の先生たち Part 2

伊藤友花 先生
ニックネーム ゆか先生
勤務 10年目
担当 子育て支援センター担当
教えるのが得意なこと 製作遊び
趣味 ゲーム

藤原亜衣 先生
ニックネーム あいちゃん
勤務 1年目
担当 うさぎ組(2歳児)
教えるのが得意なこと お絵描き
趣味 すもう観戦

小笠原みなみ 先生
ニックネーム みなみ
勤務 6年目
担当 旅行と野球観戦
趣味 旅行と野球観戦

菊池美加 先生
ニックネーム みか
勤務 10年目
担当 フリー
教えるのが得意なこと おしほりの折り方
趣味 美女と野獣の「ベル」グッズ集め

佐々木 先生
ニックネーム ささき先生
勤務 13年目
担当 ばんだ組(3歳児)
教えるのが得意なこと 体を動かすこと
趣味 トライプをして美味しいものを食べることに

東 先生
ニックネーム とう先生
勤務 8年目
担当 きりん組(4歳児)
教えるのが得意なこと バドミントン
趣味 読書、映画やドラマを見ること、米作り
最近気になっていること 米作り

小野寺愛 先生
ニックネーム 小野先生
勤務 2年目
担当 1つ組(1歳児) ※保育補助
趣味 雑貨を見ること
最近気になっていること 雑貨家

岩淵理紗子 先生
ニックネーム あり先生
勤務 5年目
担当 ぞう組(5歳児)
教えるのが得意なこと 歌やリズム遊び
特技 YouTubeを見ること
趣味 YouTubeを見ること

岩淵理紗子 先生
ニックネーム あり先生
勤務 5年目
担当 ぞう組(5歳児)
教えるのが得意なこと 歌やリズム遊び
特技 YouTubeを見ること
趣味 YouTubeを見ること

岩淵理紗子 先生
ニックネーム あり先生
勤務 5年目
担当 ぞう組(5歳児)
教えるのが得意なこと 歌やリズム遊び
特技 YouTubeを見ること
趣味 YouTubeを見ること

りんめいさんのミックスクッキング 2

親子で協力してつくってみよう



炊飯器でつくるガトーショコラ風

【材料】 卵 5個
チョコレート 360g (板チョコ5枚くらい)

- 【つくり方】
- 卵を黄身と白身に分け、白身でメレンゲを作っておく。
 - 炊飯器にチョコレートを割り入れ、そのままフタをしてスイッチオン。
 - チョコレートが溶け出したらスイッチを1回切る。
 - 卵黄を入れ、ゴムベラで混ぜる(温かいと卵黄が固まってしまうので注意)。
 - メレンゲを3回くらいに分けて入れ、ざっくり混ぜる。
 - よく混ぜたら、炊飯器の炊飯スイッチをふたたびオン!
 - 竹串をさしてついてこなくなったらでき上がり(ついてきたらもう一度オンします)。

りんめい
看護師、調理師、食生活アドバイザー。
こども園のぐるぐるミックスや屋外行事などでもお手伝いをしています。
FMねまらいにて毎週木曜18:10から「りんめいのわががクッキング」を放送中。

活動報告 9—11月のプチぐる

2020年9月18日(金)

「おもいきり絵の具 パート2」

対象：ぞう組(5歳児) プログラム考案：小笠原みなみ先生
担当：小笠原みなみ先生 / 岩淵理紗子先生 / 藤原けいと園長

2020年11月13日(金)

「色を塗ってみよう！」

対象：ひよこ組(0歳児) プログラム考案：川原尚子先生
担当：川原尚子先生 / 阿部莉加先生 / 藤原けいと園長

2020年11月18日(水)

「いろいろおえかき！」

対象：きりん組(4歳児) プログラム考案：芳賀瑞穂先生
担当：芳賀瑞穂先生 / 東柚加里先生 / 藤原けいと園長 / 大西健太郎さん(リモート参加)

2020年11月25日(水)

「かきかきぺったん！」

対象：りす組(1歳児) プログラム考案：西原未来先生
担当：西原未来先生 / 佐々木香先生 / 小野寺愛先生 / 藤原けいと園長
石田真菜さん(実習生) / 大西健太郎さん(リモート参加)

ホールの床、壁、机、台などに張ったロール紙に、クレヨン、絵の具、色鉛筆、マーカーペンなど様々な素材を使って、様々な角度で絵を描くことを楽しむプログラム。丁寧に各素材を紹介した芳賀先生の導入のあと、子どもたちが思い思いの場所に散らばり、時には友だちと協力しながら、次々と遊びを展開していきました。東京からリモートで画面越しに観察していた大西さんも、「遊びの隙間がたくさんあるようにプログラムが設計されていたので、子どもたちの多様な過ごし方を見ることができました。ホールがまるで公園のようでした」と絶賛。「プチぐる」というよりも、「ぐるぐるミックス」に近いスケールと拡がりのある活動になりました。



プチぐるができるまで

2017年度から、谷中のおかって及び講師となるアーティストが、かまいしこども園の先生と一緒に、ぐるぐるミックスで取り組むプログラムについて相談をしたり、活動に関する質問・疑問・不安な点をシェアしたりして、対話を重ねる「ぐるぐるの会」を発足させました。こども園でのぐるぐるミックスの開催に向けての素材集めや仕込みを一緒に行うほか、2016年度に続いて、先生たちが東京・谷中でのぐるぐるミックスを訪れる研修も実施しました。

2019年度のぐるぐるの会では、谷中のおかってのメンバーでもあるアーティストの富塚絵美(ちより)がファシリテーターを務めて、こども園の先生たちとワークショップを重ねました。ワークショップでは、先生たちが日頃感じている保育・教育の課題や、子どもたちに体験して欲しい魅力的な時間のイメージを土台にしなが、子どもも大人も伸び伸びと創作・遊びを楽しめるアートなプログラムを実践するための具体策を考えてきました。アーティストがつくる場と先生たちが日々取り組む保育・教育の現場を照らし合わせながら、かまいしこども園ならではのプログラムが育っていき、この年には0歳児から5歳児まで全てのクラスで「プチぐる」が実施できるようになりました。

ぐるぐるミックスin釜石とぐるぐるの会(2017~19年度)

2017

- 1.31 ぐるぐるミックスin釜石「自分マーク・自分シール」
ゲスト：松原さん
- 2.14 ぐるぐるミックス「ぐるぐるねんど」
- 2.25 ぐるぐるミックス谷中研修「自分マーク・自分シール」
- 5.16 ぐるぐるの会「ぐるぐるミックスについての説明と今年度の活動について」
- 7.11 ぐるぐるミックスin釜石「帯紙あそび」
- 7.12 先生方による自主活動：残った帯紙を使った「帯紙あそび」
- 9.9 ぐるぐるミックス谷中研修「帯紙あそび」
- 9.12 ぐるぐるの会「ミルポーの探検に向けて」
- ~10.2 「ミルポー」の素材集め
- 10.2 ぐるぐるミックスin釜石「ミルポーづくり」
- 10.3 ぐるぐるミックスin釜石「ミルポーの探検」
- 11.11 ぐるぐるミックス谷中研修「風まる妖怪」
- 12.13 ぐるぐるの会「盆栽あそびに向けて」

2018

- ~1.30 「盆栽あそび」の素材集め
- 1.30 ぐるぐるミックスin釜石「盆栽あそび」
- 2.13 ぐるぐるの会「活動の振り返り・今後に向けて」
- 5.15 ぐるぐるの会「今年度の取り組みについて」
- 7.10 ぐるぐるミックスin釜石「おもいきり絵の具」
- 7.11 ぐるぐるの会「プチぐるで取り組んでみたい遊びについて」
- 9.12 プチぐる ばんだ組「おもいきり絵の具」
- 10.2 ぐるぐるミックスin釜石「おぜんで」
- 12.12 プチぐる うさぎ組「うさぎぐみ探検隊」

2019

- 2.12 ぐるぐるミックスin釜石「ぐるぐるピクニック」
- 2.13 ぐるぐるの会「次年度の活動に向けて」
- 7.8 ぐるぐるの会 ワークショップ① 講師：富塚絵美
- 7.9 ぐるぐるの会 ワークショップ② 講師：富塚絵美
- 8.27 ぐるぐるミックスin釜石「どこでもテーブルキット」
- 9.30 ぐるぐるの会 ワークショップ③ 講師：富塚絵美
- 10.1 ぐるぐるミックスin釜石「ぐるぐるピクニック」
- 10.2 ぐるぐるの会 プログラム講座
講師：きむらとしろうじんじん
- 10.11 プチぐる りす組「シールペタペタ楽しいね」
- 10.16 プチぐる きりん組「作ろう！みんなの家」
- 10.18 プチぐる ぞう組「等身大パネルをつくらう」
- 10.29 プチぐる うさぎ組「全身で絵の具を使おう！」
- 11.14 プチぐる ばんだ組「おもいきり粘土」

2020

- 2.25 ぐるぐるの会 ワークショップ④ 講師：富塚絵美
- 2.26 ぐるぐるの会 ワークショップ⑤ 講師：富塚絵美
- 2.27 ぐるぐるミックス「あんな顔、こんな顔」



先生たちが取り組んでみたい遊びをヒアリング(2018年7月11日) 富塚絵美によるワークショップ風景(2019年7月9日)

※「プチぐる」は、各クラスの先生が、通常の教育・保育の時間とは別に、子どもたちの成長段階に合わせて独自のプログラムを考えて取り組む特別な遊びの時間です。

編集後記

「ほやほや通信」02号をお届けいたします。今号では、東京都が公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京と共催する東日本大震災の被災地域(岩手・宮城・福島県)を対象とした事業、Art Support Tohoku-Tokyo[東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業](ASTT)の枠組みを活用し、東京都台東区を拠点にアートプロジェクトを企画運営する一般社団法人谷中のおかってが実施しているこども創作教室の手法を取り入れて、2016年度からかま

いしこども園で開催している「ぐるぐるミックスin釜石」の活動を紹介しました。新型コロナウイルスの影響で東京から釜石を訪れることができない中、今回の制作にあたっては、現場でサポートを務めてくださっている特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンターの皆さまには大変お世話になりました。

「ほやほや通信」編集長 小林英治

ほやほや通信
02

発行：2021年1月6日
制作：社会福祉法人愛泉会 幼保連携型認定こども園 かまいしこども園 (<http://kamaishi-kodomoen.jp>)
一般社団法人 谷中のおかって (<http://okatte.info>)
発行元：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
編集長：小林英治 アートディレクション&デザイン：大原慎也 (ARROW MARK)
協力：特定非営利活動法人@リアスNPOサポートセンター / 特定非営利活動法人いわて連携復興センター
印刷：株式会社 中部共同印刷 お問い合わせ先：一般社団法人 谷中のおかって contact@okatte.info

文化でつながる。未来とつながる。
Tokyo Tokyo
FESTIVAL

ARTS COUNCIL TOKYO

Yanaka-no-Okatte